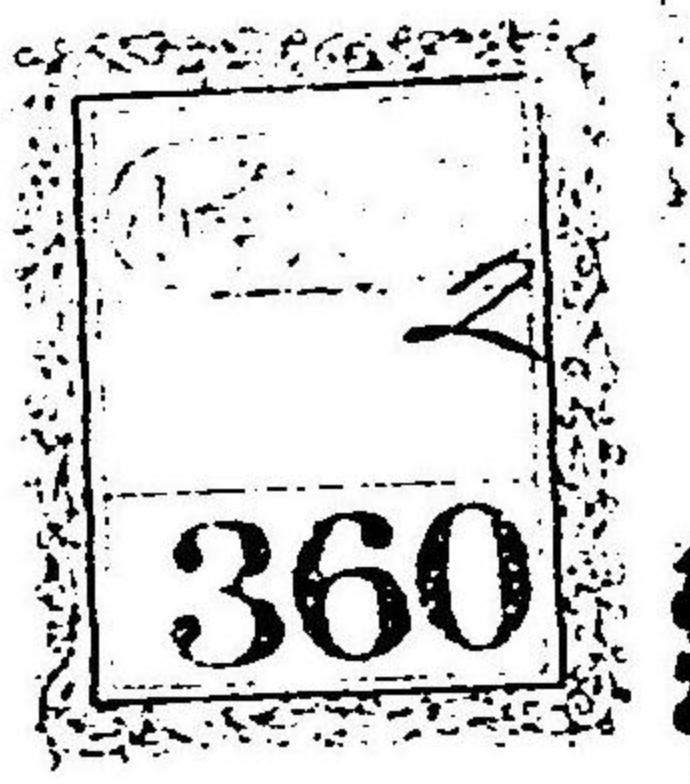


校外修身書

特26
408

卷 第
三
一 編



高等小學校外修身書

はしがき

小學校で用ふる教科書は、多くの事からを、みちかい文章で書いて、書も少しばかりであります。それゆゑ、教科書といへば、大がいに面白味のすくないものとしてゐます。今編者は、これを心配して、この書を作つたわけでありまして、すなはち面白味のない文章に、面白味をつけ、畫の少ないところに、多くの畫を入れて、教科書の缺點をおぎなうたのであります。それでありますから、學校で教科書をならうたものが、家にかへつて、この書を読めば、良い教師に復習してもらつて、面白い話しを聞くよゝであります。

教育資料研究會

明治
37 4 19
内交

高等校外修身書第三編卷一

目録

家庭心得……………一

家族團欒……………一

家庭の模範 其一 福島安正……………七

家庭の模範 其二 福島安正……………三

家庭の模範 其三 福島安正……………一六

孝行 其一 二宮金次郎……………二

孝行 其二 松平樂翁……………二六

孝行 其三 上杉鷹山……………三

友愛 其一 松平樂翁……………三七

友愛 其二 松平樂翁……………四〇

祖先 其一 佐藤家五代……………四四

祖先 其二 佐藤信淵……………四四

親族……………五二

主人と婢僕 清正と一八……………五



佐藤信淵山川跋渉の圖



二宮尊徳先生肖像

家 族 團 樂

高等 校外修身書 第三編卷一

家庭心得

家族團樂

家庭のことは、第二學年においても、そのあらましをお話
申しましたれば、兒童等も、承知のこととてございませう。し
かし家庭は、國家のもとで、大切のものでありますから、
なほここにくはしくお話いたしたいと思ひます。
世に樂の種類もいろいろありまするが、家族のものが朝
夕、首をあつめ、膝をならべて、飲食を共にし、また夜、各々そ
の分業の課業を卒へてから、うちそろつて、いろいろの話

校外修身書

などをしまする家庭團樂の樂ほどのたのしいことはないものでございます。樂といつても、無作法に、らちもなく、ふざけるの謂ひではありません。もし無作法に、らちもなく、ふざけるのならば、まことに紳士風の樂といふものではないのであります。家族互に、禮儀の中にも、和樂があり、談笑の中にも禮讓がある。これをまことの家庭といふことは、前學年において、すでにお話いたしましたところでございます。かよゝに、談笑の中にも禮讓がございませうれば、それはそれは、その家庭には、四時常にのどけき春が見まはつてゐるよゝなもの、和樂の氣は、全家にみちみつることでございます。して、かよゝに和樂の氣のみちましまする家庭に育つものは、

家庭團樂



必ず快活で、その身體も、その心も、共に健全でございませう。さらに詞をかへて申しますれば、健全な國民は健全な家庭より出づるもので、決して厭世悲哀な泣事習慣の家庭よりは出ません。ゆゑに家庭は、樂天の笑ひ習慣をつくるのがかんにんなのでございます。人間の幸不幸と申すも

家庭心得 家庭團樂

校 外 修 身 書

のは、あなたがち敢へて貧富にはかかはらぬ、よし家は貧しくございまして、よくその家庭がととのつて、常に笑聲が聞えて、和樂の氣がみちてゐまする家庭は、たいそー幸福なのでございませぬ。これに反して、その家は富みまして、その家庭がととのはずして、常に泣事が聞えて、もの争などばかりありまする家庭は、たいそー不幸なのであります。それゆゑ、家は、少少貧しくても、和樂の氣のみちた、幸福な家庭をつくらなくてはなりません。

しからは、和樂の家庭をつくりますには、どうしたらよろしうございませうか。何でも世は楽しいものと思つて、楽しい方からは、目をつけて、決して、悲しい方からは、目をつけぬのが、第一かんじんなのでございませぬ。

家 族 團 樂

家族同士の譲りあひといふことが、またきはめて大切なのでございませぬ。この事に就きましては、二宮尊徳先生の、きはめて貴い教がございませぬ。今、お話ししてお聞かせ申しませう。

先生の教に、今、こゝに八人ぐらしの貧しき家がありまするに、たまたま一枚の着物を得ましたる場合に、一人がわが物顔にこれを取つて着ますれば、七枚の着物が足りません。しかし祖父さんが、お年寄だからといつて、これを祖父さんにあげますれば、祖父さんは、「イヤなに、私はもう老體で、このよーな新らしい着物にはおよばん、太郎がお着なさい。」といふ。太郎は、「またイヤ、なに、私は大きいから、いりませぬ。」次郎が、「お着なさい。」と云ふ。次郎は、「またイヤ、私は

校 外 修 身 書

よろしうございます。甥がかはいさうだから、お着なさい。と、かよーに、八人をめぐって、みなこれを譲りますれば、もと一枚の着物にても、なほ餘りあることであります。もし互にこれは私の着るのだといって、争ひますれば、よし七枚の着物があつても、なほ一枚の不足があることであります。と、かよーに、説き示めされました。

なるほど、かよーに譲りあひますれば、八人の家に、一枚の着物を得ましても、なほ餘りあることで、ただに餘りあるばかりではなく、その譲りあひまするうちには、何とも云ふにいはれぬ、和樂の氣が通つて、その己が、着たよりは却て、他の兄弟などの着た方が、うれしいよーになることとて、ございます。かよーになれば、家庭の最上なるもので、うら

やましいほどの幸福でございます。

家庭の模範 (その二) 福島安正

家庭といふことは、これまで世の人が、あまり注意しなかつたので、古來家庭の模範とすべきものが、いたつて乏しうございます。否、時代そーおーの家庭教育は、あつたにちがひありませんが、各家庭における障子ひとへは、さながら鐵壁のよーで、その内のことは、多く世間にはあらはれずしてをりました。

それゆゑ、今、家庭の模範として、例をお話申すことは、なかなか、難しいこととて、ございます。しかしここに、一のやや模範とすべきものが、ございます。申すから、お話しませう。但し

家 庭 の 模 範

校外修身書

これ等が十分なる家庭の模範であるや否やは、わかりませんが、まづ、とにかくにも、人の家庭として、まづよい方でございませうと思ひます。

かのシベリヤの單騎旅行を以て名高い少將福島安正氏でございませうが、この少將は、猛き武夫たるにも似げなく、たいそ一家庭のことに注意する人で、常に學校と家庭と一致して、始めて全きを得るものであるといふことを信じて、わが家庭の教育に、たえず注意を加へてをります。さて少將には、家庭における精神教育は、一家の主人が、第一の任務であると思はれまして、まづ少將自身からして、酒も飲まず、煙草もすはず、つつしんで、一家の模範を示してをりまするが、かへりみれば、身はこれ國家干城の武夫

家庭の模範

として、西に東にはせまはりて、心を専らにして、家庭教育に従事することもならず、かくて兒女の教育に、缺點ありてはならぬ。誰ぞ家庭の良教師はあらぬかと、ひそかにこれを探してをりました。

たまたま成城學校の講師高島平三郎氏の徳高くして、講話も、また明快で、きくもの、みなこれに化すといふことを聞きました。これこそ、家庭の良教師であると思ひ、禮を厚くして、これを聘し、一週間に一回づつの講話を請うてをりました。

さてその講話の席には、少將まづ自ら、をりめ正しく袴をつけて、これに臨みまして、高島先生を尊みまするので、すから、自ら兒女等も、みな席を正して坐し、また自ら先生を

校外修身書



敬ふよーになるのでござい
ます。
かるるありさまであります
るから、家人等が、高島先生を
敬ひますることは、たいそー
なもので、先生の言は、一とし
て用ひられぬことはないよ
ーで、兒女等が、その講話に感
じて、その行を改めたことも、
亦少くないとまうします
ここに少將の次男は、丁年未
満なるにもかかはらず、たい

家庭の模範

そー煙草を嗜みまして、朝夕、まがなすきがな煙草を出し
てすひ、數年來、終に改むること能はずしてをりました。
しかるに、偶々高島氏が、一席の講話に、人の獨立の精神を
説いて、己に克つ心の大切なることに及びましたが、何の
氣なく、いやしくも爲すあらんとする青年が、まだ丁年に
もならぬうちからに、煙草などをすひ、徒に口腹の奴隸と
なつて、これを制する力なきものは、まことの大丈夫には
なれませぬ。」と説きまするや、少將の次男は、さすが父の子
だけありまして、忽ち大いに悟るところあつて、多年の弊
習を改め、これより後は、パイプと煙管とは、たえて手にだ
に觸れぬよーになつたといふこととであります。
右は高島先生がよくこれを教誡したるによるとはいへ、

少將がまづ自らその模範を示して、一家をひきゐたる功が、あづかつて力あることとでございます。

家庭の模範 その二 福島安正

福島少將が、常に物に觸れ、事に當つて、直接に、唐太宗流の家庭教育を施してゐますことは、なかなか、注意のとどいたものでございます。

曾て十餘年の昔、少將が、まだ政府の命を帯びて、獨逸におもむきませぬ頃のことでありましたが、一日、身の閑暇なるため、二人の兒童を連れて、上野公園にまゐりましたが、親子三人、よい心もちに、あなたをたと散歩してをりましたるに、やがて東照宮の社前にいたりますると、例の石

校外修身書

家庭の模範

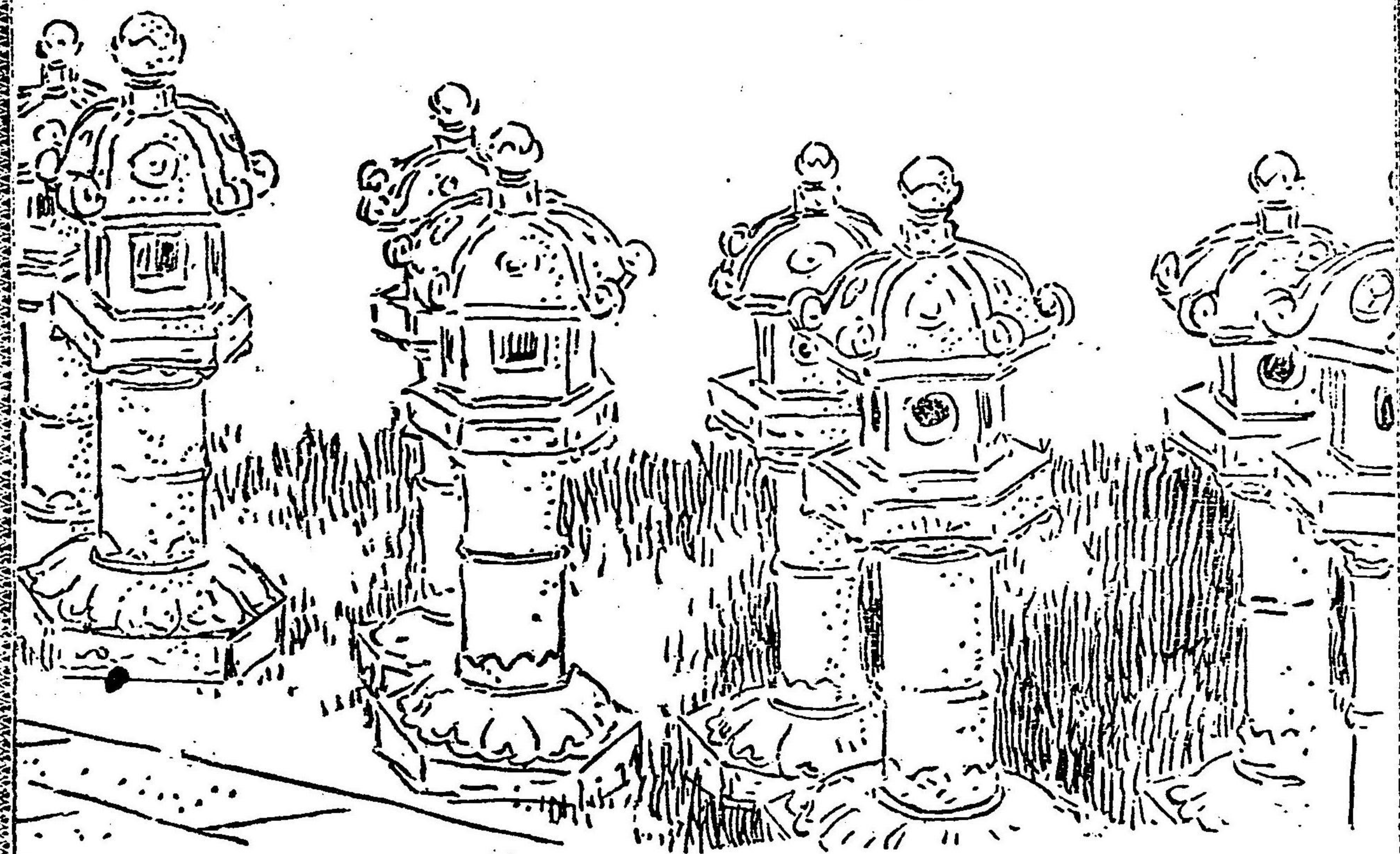
燈籠が兩側に幾十となく並んでをりまするを見て、少將は突然、この石燈籠の總數はいくばくありまするか。との問を起しました。

二人の兒童は、この問を得て、一二三四と順に數へ、そのすでに一行數へたものへ、何列といふ、列數を掛け、暗算にて、その總數を得て、これを答へましたら、少將は、たいそーきげんがよかつたといふこととでございます。

これは少將が、わが子等には、各列數を残らず、めいめい數へなくては、その總數が、わからぬか。それとも、一列だに數へなば、その餘は、行に列を乗じて、直にその總數を得るか。と懸念して、この問を發して、ひそかにその才能をためしたのでございます。實に珍しい注意のゆきとどいた人で、

校外修身書

散歩しながら談笑の間に、知らず知らず兒童に、知識をひろはして歩きますのは、感服なことでございます。また、世界地圖にいたりましては、少將が、最もふかく意を用ひて教へまする、家庭教育の一つとして、常に讀書室の壁間にかゝげられてあります。これは、人の雄大なる氣象を養ひ、高遠なる志望を起さしめますものは、世界地圖に



家庭の模範

如くはないといふ少將の意見によつて、常にこれをかかげて置くのてございませう。實に貴い意見でございます。

少將は、かよゝに、常に座右に、世界の地圖をかかげて置きまして、日頃の



家庭心得 家庭の模範 その二 福島安正

校 外 修 身 書

談話やまたは新聞雑誌などを見まして、いやしくも、その世界に關係のありますことは、ここが昔、英のウエルリントンが、佛のナポレオン第一世を破つた、ウォートルローである。ここが、曾て英佛同盟軍が、露軍を破つた、クリミヤである。と一一その位置を示して、居ながら、世界の形勢を手に取るごとく教へてをりますかよーに養成しますから、自らその氣象が大きくなつて、天地を吞吐するよーになります。誰にても、二十世紀の兒童は、このくらゐの養成がなくてはなりません。

家庭の模範 その三 福島安正

福島少將は、もと軍人でもございまするし、ことにまた天

家 庭 の 模 範

性何事も紀律の正しい人でございまするから、兒童等のねるもおきるも、みな一定の時刻があつて、決してこれに違ふことを免しません。

さて毎日、午後三時半、兒童等が、學校から歸り來りまして、後、まづ四時までは、復習いたさせますのですが、四時より六時にいたる二時間は、運動體育の時間に充てられてをるのでございます。

されば午後四時の時計を聞きますれば、今までの讀書の聲は、びたり止んで、ここに少將の庭園は、たちまち目覺しき、一大運動場と變ずるのでございます。

その時、近隣の子弟等も、また早くより門外に集り來り少將の庭園の、運動時間のいたるを待つてをりまして、その

校 外 修 身 書

四時の聲を聞くと均しく、ひしひしと寄せきました一群の少年隊は、さきを争うて、場内に推入ります。そのありさまは、さながら潮のよせた如くであります。さてその運動體育の法は、多くは、機械體操で、その勇壯活潑なことは、實に目覺しく、これがため、ただにその身體の強壯になるばかりではなく、また、併せてその心も、快活になるのでございます。少將の家庭のごときは、まことに、よく務め、よく遊ぶと云ふべきものでございます。少將の家庭において、兒童等の復習時間は、夜六時すぎ、夕飯を食しまして後も、またございますが、この復習時間の遊戯などにつきましては、少將は、實に面白い工夫をこらしてをります。

家 庭 の 模 範



初め少將は、紙片を切つて、簡單なる軍艦の形をつくりまして、これに「松島」だの、「嚴島」だのといふ、わが國の軍艦の名を記し、またその軍艦が、戦闘艦であるとか、巡洋艦であるとかいふ、軍艦の種類をも記しまして、座席にて、勇しき海戦の状をなすのでございま

家庭心得 家庭の模範 その三 福島安正

書身修外校

す。
 かよーに、座上にて海戦をなしまして、遊戯娛樂のうち、それぞれ軍艦の噸數や速力などを教ふるのでありますが、實に面白い工夫であります。
 しかるに少將は、後に、この遊戯は、兒童等がみな疊に伏して身體をかがめるので、胸郭の發達にさまたげがあるとして、今はこの遊戯を止めたさうでございますが、この一事を以て見ましても、少將が、いかに、家庭教育に注意してゐるかが知られませう。
 また少將は、兒童の教育は、ただに書物の上にはばかりあるのではない。山といひ、野といひ、また森といひ、林といひ、これ等の實物は、みなこれ教育の好材料であるといふこと

孝

行

を、深く信じてをりまして、つとめて郊外散歩を獎勵してをります。かくてその目に觸れ、耳に聞く、實物について、直にその性質功用を説いてきかせますことは、ちよーど唐の太宗の家庭教育と同じよーな方法でございます。
 さきに少將が、シベリヤ萬里の曠原、氷雪の中を、單騎で旅行して、内外の人を驚かしましたいさをしは、えらいはえらひですが、しかしこの注意ふかき、家庭の良主人たるは、なほ一層えらいこととて、まことに軍人の好龜鑑で、また併せて一般國民、家庭主人の好龜鑑でございます。

孝行 (その二) 二宮金次郎

人の子たるものは、曾て父母の懷を、よき寢所として、ここ

校 外 修 身 書

にうまねし、また父母の膝をよき公園として、ここに遊んで、大きくなったことを思ひますれば、人は、孝行ほど大切なものはないのでございます。

さすがは、人は、萬物の靈とも云ふだけあって、昔から、孝行の人も、たくさんございましたが、二宮金次郎尊徳先生のときは、最も孝子の龜鑑とすべきものでございます。今先生が孝行のあらましをお話いたしませう。

先生が、十歳前後のときでございましたが、父利右衛門には、慈善事業のため、家の金銭は、ほとんどみな施し盡してしまひ、その上、大病にかゝりましたので、もと可なりの身代も、みなつかひ果して、いたく貧苦に迫りました。その後、幸に病氣はいえましたが、利右衛門は、病後の身體とて、と

孝

行

かくに思ふままに働くこともできずして、その日その日を送つてをりました。

しかるに、この利右衛門といふ人は、うまれつき、たいそゝ酒を好きましたのですが、まへ申します次第にて、好きな酒も、十分に飲むことが出来ませんでした。

その頃、金次郎は、その身の幼きにも似げなく、殊勝にも小腕を以て、毎日草鞋を作つてこれを賣り、その錢を以て、一合づつの酒を買ひ求めまして、毎夜これを父の前にすすめたといふことでございます。

一合の酒は、さして多いといふではございませんが、しかも、その酒の中には、金次郎の、大いなる孝心がこもつてをるのでございます。父も、定めて、うまく飲んだこと

校 外 修 身 書

てございま
せう。
かくて、金次
郎が年十四
歳のとき、父
利右衛門は、
金次郎をは
じめ都合三
人の子を遺
して、病死し
ました。こ
る母子四人



孝

行

のなげきかなしみは、果していかばかりでございませう
か、實に目もあてられぬありさまで、さしむき、第一の困難
は、生計のことでございます。

一日母は、金次郎を、身邊近くよびて、言はるるよーは、かよ
わき母の手一つにては、とても三兒の養育はなし難いこ
とであります。ついで、そなたと、次男三郎左衛門と
は、いかにもして、養はんとは、思ひますれど、三男富次郎ま
では、力及ばぬことであれば、不憫なれども、富次郎をば、身
よりのものにあづけよう。とて、まだ乳の離れませぬ末子
を、隣村の身よりのものにあづけました。

かくて母は、貧苦のうち、に、労働しようと思ひましたが、思
ひたへても、思ひたへられませぬのは、親子の情で、さすが

校 外 修 身 書

に恩愛の情にひかれ、毎夜、富次郎のこのみ思うて、ろくに安眠せぬ様子でございました。

ものに敏く、ことに孝心深き金次郎は、母が、始終の様子、いかにも心ぐるしく思はれまして、一夜、母に向つて、その故を問はれましたるに、母は、「ハイ、別段のことのあるにてはありませぬが、ただ富次郎をあづけてから、乳が張つて困ります、それが、さよーに心配するにも及びませぬ」と言ひまぎらし、餘所を向いて涙を流しました。

金次郎は、とくに母の心中をおしはかりて、「赤子一人ゐましたとて、何ほどの困難を増しませうぞや。ついては、私が小腕ながらも、明日よりは山にゆき、薪をきりて、錢に代へ、富次郎の養育の料にあてませうほどに、早く富次郎をも

孝

行

どして下され。」と言はれました。

母は、世にもたのもしき、金次郎が言を聞きまして、たいそゝ喜ばれ、その時は、四ツ時とて、今の午後十時をも過ぎた夜ふけてありました、子を思ふ一心にて、田圃路のものさびしきも心に留めず、ひた走りにしりゆき、身よりのものの家にいたり、事の仔細を語りまして、かはゆいわが子をかき抱き、早速はせかへつて、親子四人顔を合せたうれしさは、何に譬へんよーもなきよーに見えました。さればこれより、金次郎はなほ幼き身を以て、毎日未明、霧たちこめる山に踏み入りまして、薪をきり、しばを刈り、また夜は、人の寝しづまるまで、繩をなひ草鞋を作りなどして、生計を助け、ひたすら母の心を安んじ、二人の弟を養つ

校 外 修 身 書

てをりました。なんと金次郎の如きは、よく母の心を安んじまゐらせた、孝行ものではございませんか。
 金次郎は、ただに母に對して孝心なばかりではございません。弟に對しましても、實にこの上もない友愛の情に深いものでございます。金次郎が、後に二宮尊徳先生とて、廣く世間の人に尊まれ、また、報徳神社としてまつられて敬はれ、遂に教科書にまで書れるよゝになりましたのも、このよゝな孝行であり、友愛であつたうへに、後世のために、大いなる益をはかたからてでございます。なんと善い人には、なりたいものではございませんか。

孝行 (その二) 松平樂翁

孝

行

養子または嫁増となつて、他家に入りましたものは、その家の父母に孝行を盡しますことは、やはり實の父母と同じこととて、決して異なつてはなりません。この事につきましては、松平樂翁公に、よい教が、ございます。今、話してお聞かせ申しませう。

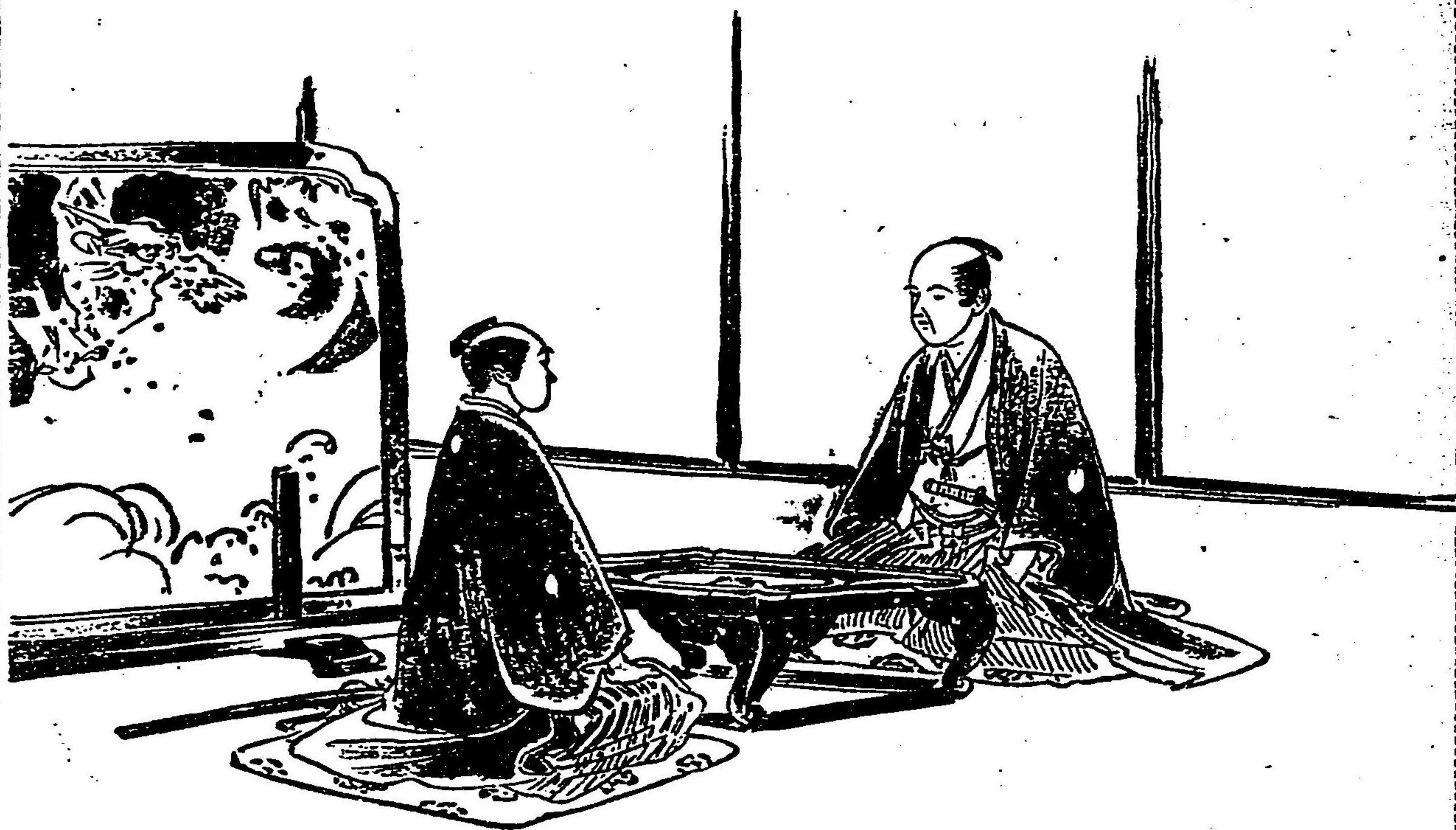
松平樂翁公は、もと田安宗武卿のお子でございましたが、後、白河の松平家の養子とられたので、その實家の父母は、もちろんのこと、養家の父母に事へましても、實の父母と少しも異なることなく、同じよゝに、よく孝行を盡されましたのは、世にも、たぐひ稀なることとて、ございます。一日或る大名が、樂翁公に向つて、「私は、こたび或方へ、養子に行くこととなりましたが、養子として、その養父母に事

校 外 僱 身 書

へ、その領内を治めますることは、いたつてむづかしいと聞きましてござる。ついては、そのもとには、すでに養子として、他家を相續なされたのでござれば、定めて、その艱難のほども、よく知りたまふこととてございませう。願くは教へてたまはれ。」と請はれました。

樂翁公は、容を正うして、これに答へて申されまするには、「これは存外なる御問でありますかな。私は、別に養父母に仕ふる道などといふものを存じませぬ。私思ふに、さよゝに、こなたより、養子などと思うて事ふるゆゑ、先方にて、もまた養父母として、われに對することとて、かく互に隔てがありましては、とてもまろく治まるべき道理はないのでございます。私は、此松平家に來ました時から、養子と思

孝 行



うてはをりませず、やはり實の父母とおもうて事へてをりまするゆゑ、養父母もまた實の子として、私を愛せられます。一言以てこれを云ひますれば、私の心には、初より、養實などといふ差別はなく、いつそ初から、養子の養といふ字の意義を知らなかつたこととてございます。それゆゑ、今あなたに對しましても、宜し

校 外 修 身 書

く養子の養といふ字をお忘れなされと云ふより外に、言ふべきことはございませ。と教られたので、彼の教を請うた人は、金玉の教を受けたとて、たいそ一喜んだといふこととでございませ。

これは世の養子たるものの心得として、かふべからざる教でございませ。養父母たるものも、またこの旨を心として、互に養といふ思を去りますれば、その家は必ずまろく治まるものでございませ。世に白河樂翁公とて名高い人となつたのも、また尤のこととでございませ。

孝行 (その三) 上杉鷹山

上杉鷹山公も、また他より来て、上杉家を相續した方でご

孝

行

ざいまするが、上杉家の父母に事へて、よくその孝行を盡されたこととでございませ。ことに鷹山公は、よくその父母の心に事へました。

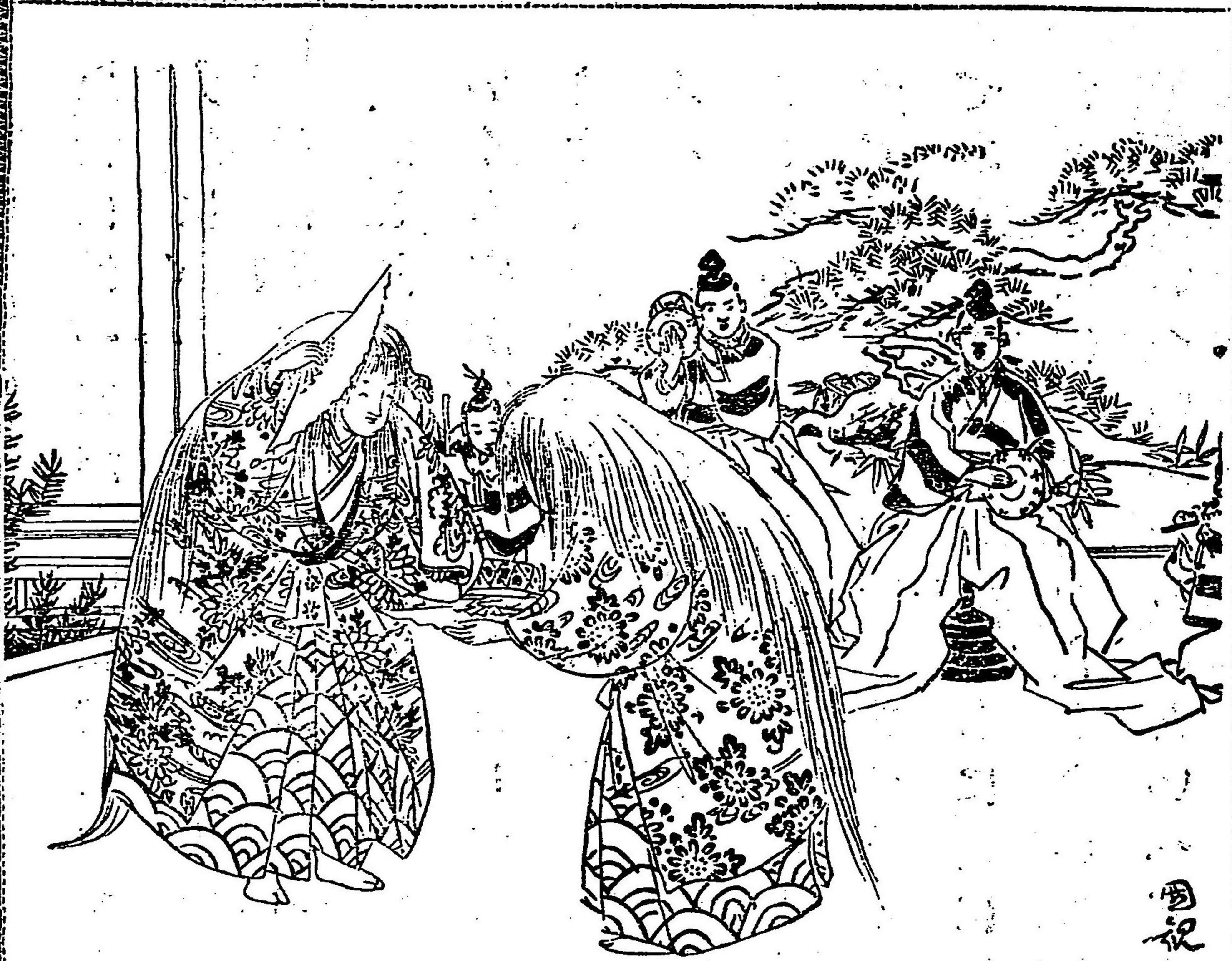
呂新吾の語に、「人ノ子ノ親ニ事フル、マ、心ニ事フルヲ上ト爲シ、身ニ事フルハ、コレニ次グ。」と云はれましたが、鷹山公のごときは、よく孝行の上乗とも云ふべき、父母の心に事へたのでございませ。

鷹山公が、かつて、領内九十歳以上の老人を召出して、厚くいたはり、物など賜ひましたが、その時、老人に附添へ來ました子や孫どもが、かひがひしく、給仕しまするさまを見られ、傍の家來に、「ああなた、年寄を安んじ、父母に事ふるは、誰もかくこそありたきものではないか。」と言はれ、これ

校 外 修 身 書

より後は、父重定公を招かれます毎に、いつも必ず自ら給仕せられたといふこととでございます。さて、鷹山公の父君には、たいそ一能樂を好まれたさうでございませうが、鷹山公は、あまりこれを好まれませぬゆゑ、常にこれを見らるることも、いと稀でございます。しかるに、或時、鷹山公、ふと心づきて思はれますよ一は、父君のかくまで好ませたまへるものをも、しわれ嫌などとまうしたならば、父君にも、自然心をおかせらるることであらう。かくては、存外の不孝に陥るわけである。これは輕からぬことであるとして、大いに心をいためられました。さて、鷹山公には、これより後は、好まぬ能樂をも、好めるよ一にして、稽古を始め、わが屋敷にて、能樂のもよほしのあ

孝 行



因祝

りまする毎には、いのも、必ず自ら、父君の御相手をせられたといふこととでございます。これ等を、その父母の心に事ふるものと云ふべきでございます。う。よき孝行の手本でございます。ついでにお話申したことがあります。それは外でもありませ

校 外 修 身 書

ぬ。世には、一家が貧困にせまつたときとか、または、父母が、大病にかかったとかいふよーな、非常の場合でなければ、孝行は盡せぬものと思ふものがあるよーでございます。るが、これは、大いなる誤りでございます。いくら家が富みさかえましても、孝行は、いくらでも盡せます。また、父母が、いくら健康でありましても、孝行は、もちろん盡せるのでございます。日頃、よく父母の言ふことをきき、その命ぜらるるがままに、とく、勇ましい返辭をして、すぐ起つて、その用をしますなども、もちろん孝行の一つであります。これを要するに、常に常の孝行があり、變つたときには、また變つたときの孝行があります。それゆゑ、孝行は、いついかなる時といへども、誰にても、盡せるもの

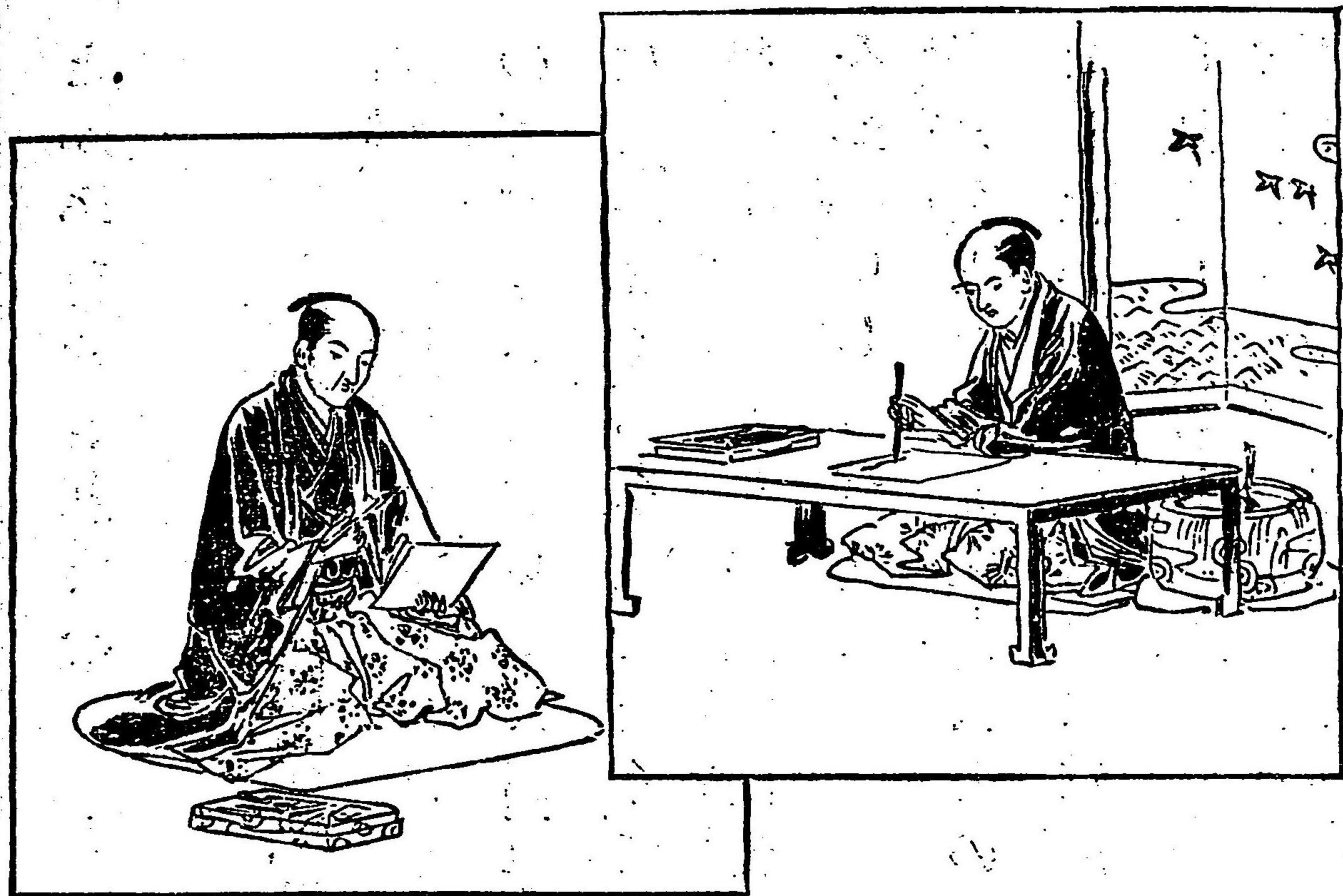
とお心得なされませ。

友 愛 (その一) 松平樂翁

友愛とは、兄弟姉妹、互にあひ愛し、互にあひ助くるをいふのでございます。兄弟ハ、兩手ノ如シ。とも申しますれば、互になかよく、あひ親まなくてはなりません。さて、友愛には、松平樂翁公と、その兄定國公とは、よい手本でございます。今、お話しませう。

樂翁公と、その兄定國公との中は、いたつて睦しうございました。ました。かつて、樂翁公には、濱千鳥の繪に、繼色紙あるを得られました。これは、よき物を得た、千鳥には、かねて父君田安宗武公の詠れたる歌のあるに就いては、これを見上の

書身修外校



もとに送つて、その自筆にて、これを書いてもらひたしと思はれて、その色紙を、兄のもとに送つて、その揮毫を求められました。

兄定國公は早速に承諾せられました。兄のものとより、また同じ色紙を樂翁公のもとにつかはされました。これにも、同じ父上の詠れし千鳥

愛

の歌を書いてたまはれと求められました。樂翁公も、また喜んで、これを承諾せられました。こゝに於て、兄弟共に、その書きぶりを示しあはせ、互に同じ日に書いて、同じ日におくられたといふこととでございます。その父君の詠れた千鳥の歌といふのは、

千鳥さへ友よびかはし遊ぶなり

などてや人のひとり樂しむ

といふのでございます。この歌のこゝろは、かの智慮なき千鳥すら、互に友よびかはして遊ぶてはないかな。なにとて、萬物の靈とも云ふべき、人たるものが、獨りさびしく樂しむのであるか。ことに、兄弟などは、互になか睦しく遊ぶべかしといふのでございます。實にや、樂翁公兄弟は、互に友愛

校 外 修 身 書

の情ふかく、共によびかはされて遊ばれたのでございませぬ。誰も、兄弟姉妹となりては、かくこそありたきものでございませぬ。

友愛（その二）松平樂翁

樂翁公は、ただに兄君との間柄のみ友愛の情の深かつたのではございませぬ。その妹種姫との間柄も、またいたつて深くあられたこととてございませぬ。樂翁公も種姫も、その初幼かつたときには、同じ家庭に成長し、寝食も共にし、また遊戯も同うせられたこととてありました。が、長じて後、樂翁公は、白河の松平家の養子となり、また種姫は、將軍家の養女となりて、大奥にゐられること

友

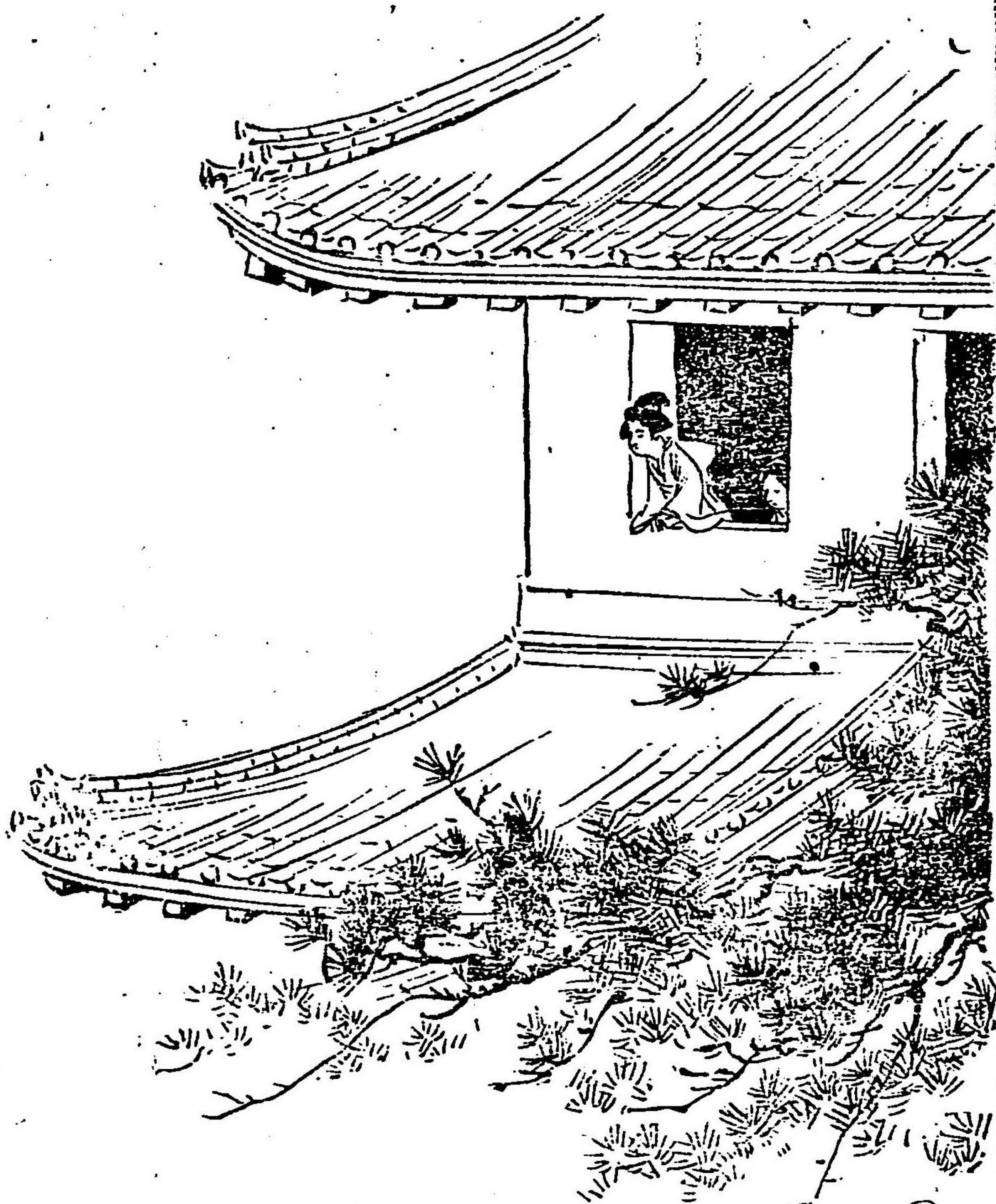
愛

ととなりました。ことに高貴の人の、かよゝに分れたこととてございませぬ。均しく身は江戸にをられました。なかなかに面をあはせるといふよゝなことも、出来なかつたのでございませぬ。

友愛の情にあつき種姫は、どうかして、兄君樂翁公にあひたいと思はれました。が、その便宜がございませぬ。せめては、御城の櫓の上より、兄君登城の姿なりと見たいと思はれました。が、三百の大名、いづれも駕籠にて、いづれを見君の駕籠とも見分けがたいので、ほとほと困つてをられました。

種姫は一日、右の趣を手紙に認め、使を以てこれを見君のもとに送られて、その駕籠の模様を教へ下されと、請はれ

書身修外校

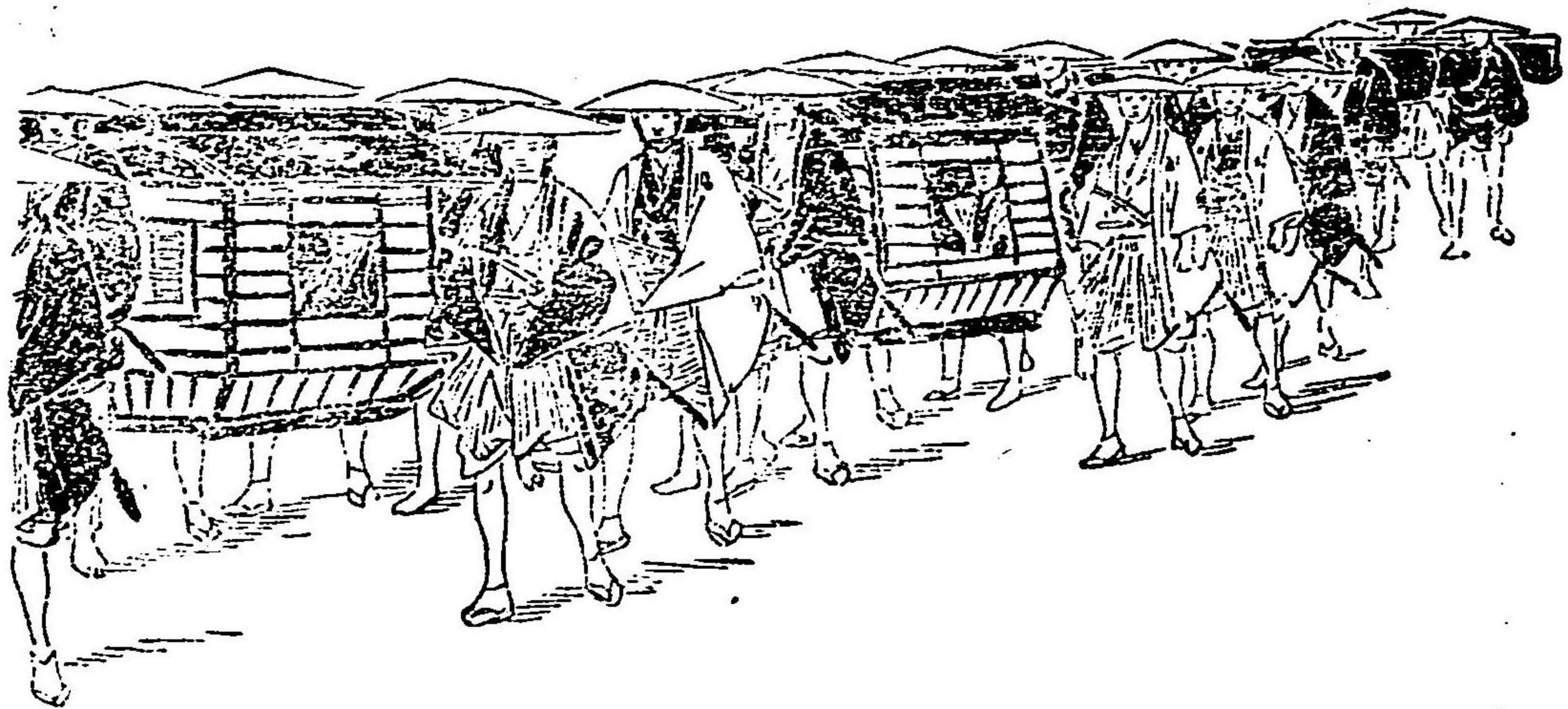


つて登城するはわが父君重定公とわれとにてあれば、さ
 よ一御承知あられたしと答へられました。
 ここに於て、種姫はたいそ一に喜ばれ、これより後、毎日、諸

ました。
 樂翁公は、この手
 紙を見られて、た
 いそ一に喜ばれ
 まして、早速に返
 事を認め、これこ
 れかういふ形に
 て、なににの色
 の駕籠二挺そろ

友愛

侯登城の時刻には、いつも御城の櫓に
 登りて、遙にこれを眺められ、かねて教
 の駕籠の來たりますれば、うれしくも、
 目禮をして、これを見送られたといふ
 ことであります。その後、種姫は、千代田
 城大奥の庭園にはえてゐます。いとめ
 でたい白菊を、根のまゝ、兄君のもとに
 おくられました。
 樂翁公は、この白菊を得て、たいそ一に
 喜ばれ、早速に、わが庭に植ゑましたが
 これより後は、樂翁公身の暇だにあれ
 ば、庭に出でて、この白菊をながめて、妹



校 外 修 身 書

種姫にあらた心ちして、なつかしく思ひくらされたといふこととでございます。

ああ、兄妹、各々つとめがらにて、互に直接にあふことができませんければ、共にかよーにして、間接にあふ工夫をしてをられますは、なんと、友愛の情の深いことではございませんか。兄弟姉妹となつては、誰もかくこそありたきものでございます。

祖先 (その二) 佐藤家五代

祖先に對する務の中にて、最も大切なるは、家名を汚さぬこととでございます。なほ一層大切なるは、ますますその家名を揚ぐるのでございます。世に祖先の遺旨を奉じ

祖

先

て、ますます、その家名を揚げましたのは、佐藤家の人人に如くものはないとおもひます。

世に、楠木三代、真田三代などといふ、三代名家の續いたことは、稀にはございます。が、佐藤家のごとく、五代名家の續いたことは、廣き世界にもほとんど稀なることとございます。います。ことに、五代共に、祖先の遺志を繼いで、順次に、その主義を貫きましたのは、實に驚くばかりで、祖先に對する務の好龜鑑でございます。

そもそもこの佐藤家と申しまするは、羽後の醫者で、その祖先は、歡庵といふ人で、ふかく心を農業のことに用ひました。が、さて一國、農業の發達をはかるには、是非とも、地圖、氣候、土性、水利、耕種の五條目を、ふかく研究しなくてはな

書身修外校

らぬと思はれ、まづ地圖のことに力を盡し、その研究を終つて、順次に他の研究にうつらんといたされました。しかるに、人間の精力といふものは、およそ限のあるものにて、ことに完全を期したことでありますれば、歡庵は地圖の研究に、ほとんど一生を要し、その研究のできあがりました頃、をしいかな、前途の希望をのこして死なれました。

しかるに、その子が父の遺志を繼いで、氣候のことを研究しました。が、その孫が、また、土性のことを取調べました。その後、曾孫が、水利のことを明にせられました。かくて、その玄孫にあたります、有名なる信淵が、生まれて、遂に、その最も大業なる、耕種のことを修めて、こゝに全く佐藤家の家

先 祖

學を大成せられました。なんと、これ等は、子孫がよく祖先の遺旨を奉じて、その家名を揚げたるもので、すなはち祖先に對する務の好龜鑑では、ございませぬか。ことに信淵は、最大の難事にあたつて、よくこれを大成したことでございします。から、次に項をあらため、信淵のことについて、少しくお話いたしませう。

祖先 (その二) 佐藤信淵

つとに祖先の遺志を繼いで、その家學を大成せんと企てられました。佐藤信淵先生は、幼きときより、聴くして、ことに膽力もすぐれて、をられました。れば、十三歳のとき、早くも父に従つて、寒風ふきすさびます蝦夷として、今の北海道

機 外 修 身 書

にゆかれまして、雪や氷をふんで、土地の様子をしらべ、奥州各地をめぐって、その翌年家に歸られました。その後、また父に従って、廣く諸國をめぐられました。六歳のとき、遠き旅路にて、父に死に別れました。さぞかし悲しかったこととてございませう。しかし、これも、みな家學研究のためとてございしますので、なほ年若き信淵先生は、決してこれがために、その素志を挫かれませんで、ますます家學研究の志を起されました。實に感服なこととてございませう。

信淵先生は、これより、江戸に出て、苦學せられました。が、學資の乏しくして、ほとんど、油を買ふ金もないときがあつたので、僅に線香の火影で、書を読まれたことがあつた

祖

先

さうでございませう。なんと、マア、螢や雪を集めて、書を読んだ、むかしの人も、思ひあはさるることではありませんか。先生は、まづ一通の學問せられて後、いかにもして、祖先の家學を大成せんと決心いたされました。これより十年の間、寒暑をいとはず、四方をめぐられまして、人跡もたえし深山に分け入り、鳥獸も通ひませぬ、谷間を渉りあゆまれ、時としましては、野宿をもちいたして、夜をあかさされ、草根木實を食べて飢をしのがれなどし、つぶさに艱難をなめて、ほとんど日本全國に、その足跡をとどめられました。先生は、かよ一に、日本全國を遍歴せられて、つぶさに風土を検し、物産をしらべて、耕種の研究をいたされました。かくて再び江戸に出てられまして、さらに農學を研究し、

校 外 修 身 書

傍ら兵術を講じせられたので、その名天下にあらはれて、弟子の門に集るものが群をなし、諸侯の來つて教を請ふものも、常にたえませんでした。これより先き、先生は上總の片田舎に退いて、専ら著述に従事せられて、諸種の農學書を著されました。こゝに於て、農政のことはもちろん、播種耕作、肥料、收穫等のことが、みなあかるくなり、またその間、諸侯の請に應じて、殖産をすゝめ、水利土功を興されましたことも、數多いことでございます。

これみな祖先がのこして置きました、耕種の研究で、高祖父歡庵より、こゝに至つて、二百餘年、五代を経て、遂にその佐藤家の家學を大成されたのでございます。高祖父は、も

祖

先

ちろんのこと、祖父も、父も、みな定めて草葉の蔭にて、よろこばれたのでございませう。實にこれ等が、祖先に對する務を全うしました、好龜鑑でございませう。今の人も、後の人も、かういふ手本は、學ぶべきことでございます。

ついでに、お話ししたいことがございませう。そは外でもありません。世間には、祖先の墳墓の地を離れぬのを以て、祖先に對する務と心得て、一向に、遠き地に出ぬものがままあります。これは大いなる心得違といふものでございませう。もし移住の必要がありませうれば、必ずしも祖先の墳墓の地にのみ、留るを要せぬこととて、佐藤信淵先生のごときは、もとは羽後の人でございませう。が、後には、江戸や、上總に住ひました。しかし祖先の遺志たる、家學は、よく大

校 外 修 身 書

成して、その祖先に對する務を全うせられました。これはよい手本でございます。まして電信、電話や、汽車、汽船の發明で、世界が狭くなつたといふ、日進文明の今日では、よし祖先の墳墓の地を離れましても、よく活潑に往來して家名を揚げますのが、却つて祖先に對する務を盡すのでございます。このおもむきは、誤解しないよゝに願ひたうございます。

親 族

今、ここに親族と申しまするは、伯父、伯母と、甥姪などの間柄をいひまするのであります。これ等はいづれも近親と申して、いたつて近き親族でございます。

親 族

よし右等のごとき近親でなくとも、同じ祖先より出てました同家同姓、いはゆる本家分家などと唱へまするものは、これまた親類のものでございます。から、親しくしななくてはなりません。元來親族とは、「親しき族」といひまするので、すから、ただこの親族といふ字を見たばかりでも、親族の間は、互に親しくなくては、ならぬといふことが知られませう。しかるを、ともすれば、親族間にも、争などのありまするは、甚だなげかほしいこととて、實に人間の耻辱であります。どうか親族としては、決して、争などをしてはいけませぬ。ただに、もの争などしてはいけぬのみならず、互に親しく交らなくて、は親族とはまうされませぬ。

校 外 修 身 書

もと親族はいかに親しきなかとはまうせ、相當の禮儀は、
 なくてかなはぬものでございませぬ。さりとして虚禮になが
 れては、いけませぬゆゑに、虚禮にながれぬよ一質朴の中
 に、眞實の禮儀あるよ一にと、つとむるのが、肝要でござい
 ます。

親族の中には、自然富めるものもあり、また貧しきものも
 あつて、必ずしも同様ではございまんが、しかしその尊敬
 しあひまする點は、みな同じよ一でなければなりません。
 貧しいとて、決してこれを賤しんではなりません。また富
 めりとして、妄にこれに依頼してはなりません。依頼心は人
 間の最も耻づべきものであります。

しかし親族の間に、火事病氣などがありましたときは、他

親 族

の親族は、その貧富にかゝはらず、力を盡して、これを救は
 なくてはなりません。これが親族の義務であります。責任
 であります。かの他人にてすら、人の不幸災厄のときは、往
 往義捐金といふものを送つて、これを助くるではござい
 ません。か況んや同じ血族から出た親類の不幸におきま
 してをや、これを救ひまするは、もとより當然なので、かか
 る場合に、これを救ひませぬのは、ただに親族とは云はれ
 ぬばかりではなく、實に人間とは云はれぬのでございま
 す。それゆゑ、親族の不幸は、力を盡して、これを救はなくて
 はなりません。

しかし、世の中は、さまざまで、敢て火事病氣等、自然の災厄
 にあらたでなく、ただ懶惰のため窮して親族の厄介に

校 外 修 身 書

なるものが、ままありますが、これ等の懶惰者を救ふは、利であるか、害であるか、實はわからぬくらゐであり、ますから、かゝる懶惰者は、よし親族でありましても、あまり救はぬ方が、却つて當人の奮發心を起さしむることとなるのであります。

親族に對する務は、いろいろありますが、まづこのくらゐのことを心得てよく實行しますれば、親族として、耻かしくないことでございます。

主人と僕婢 清正と一八

古語にも、良主ノモトニハ、良僕アリと云つて、良主のもとには、奇妙にも、良僕のあるものでございます。かの織田信

主 人 と 僕 婢

長公に、木下藤吉郎があり。加藤清正公に、正直一八があり。また西郷隆盛に、忠僕熊がありました。などは、著しい例でございます。今、清正公と正直一八との一例をとつて、お話いたします。

加藤清正公の、仁心の深いことは、すでに第一學年においてお話いたしましたところでございます。清正公は、さよーに仁心の深い人でございますから、もちろん僕などに對しても、情の深かつたことでございます。主人がかよーに情の深かつたことであり、ますから、自然その反射とも云ふべき、正直者の一八といふよーな僕が出ましたのでございます。

清正公が、十歳のときより、正直者の一八とて、草履取の僕

校 外 修 身 書

がありました。主人大事とつとめまされたことは、實に類のないほどで、清正公が二百石になられましたとき、若黨にいたさせられましたところが、一八は固くこれを辞しました。

その後、賤ヶ嶽七本槍の高名をせられて、清正公は五千石を賜はりましたため、一八をとりたて、家老になさんといたされましたが、一八はまた固く辞して、依然一本差の僕がよいとて、草履取をしてをりました。

清正公は、あまり不審なので、よくよくききただして見られたところが、これは清正公の母君の遺命であつたといふことでもあります。その遺命といふは、外でもありません。清正公の母君が、かつて一八に命じて申されますには、

主 人 と 僕 婢



「汝、よく虎之助が影となり、家に居ても、外に出ても、決して主人の身を離れてくれるなよ。」と申しつけられました。

虎之助とは、清正公の幼名でございます。さして一八は、もと正直者でございます。いまするか

校 外 修 身 書

ら、清正公の母君の遺命をかたく守つたので、清正公が「汝は、何故侍にはならぬか。」と問はれましたとき、一八がこれに答へて申しまするには「殿の身を離れてくれるなどは、かねて先夫人の仰せおきでもし侍になりましたは、御側勤もなりがたいこととでございます。さるを御草履取になつてをりますれば、さながら影の實物を離れぬごとく、いつまでも殿の御側近くにをられますれば、このまま永く御召使ひ下されたうございます。」と、到頭一生涯草履取の忠勤をはげんだといふこととでございます。

さるにても、清正公は、人情の深い人で、かよ一によく忠勤をはげみますものを、そのまま見てもをられず、どうかして、これを侍にとりたてようとせられましたも、正直者の

主 人 と 僕 婢

一八は、どうしてもききませぬ。ここに於て、清正公は、よんどころなく、「一八よ、汝もし子を持たば、われこれをとりにて、干石以上の侍にせん。」と言はれましたが、一八は、仰はかたじけなうはございますが、妻をめとつて子を持ちますれば、とかく私の家事にとりまぎれて、勤むきのおろそかになりますれば、相變らず、獨身こそ望ましうございませ。とて、一生無妻にて、すぐす願を立てたといふこととでございます。

なんと、主人も主人で、機會を見ては、とりたてようとする良主でございませが、僕も僕で、どこまでも主家の老夫人の遺命を奉じて、その身の立身をこばみつつ、主人の側を離れぬよ一にとつとめたる良僕ではございませんか。實

に清正公と一八とのごときは、主従しゅじゆんのよき龜鑑きかんでございます。

書身修外校

高等小學校外修身書第三編卷一終

明治三十七年四月十七日印刷
明治三十七年四月二十日發行

著作權所有
每冊定價金八錢郵稅二錢

校外修身書 尋常四年用全四冊 高等科用全十八冊

●尋常小學校 第四學年 全四冊
發行の月 ▲卷一、四月 ▲卷二、六月 ▲卷三、八月 ▲卷四、十月

●高等一學年 第一編 全五冊
發行の月 ▲卷一、四月 ▲卷二、六月 ▲卷三、八月 ▲卷四、十月 ▲卷五、十二月

●高等二學年 第二編 全五冊
發行の月 ▲卷一、四月 ▲卷二、六月 ▲卷三、八月 ▲卷四、十月 ▲卷五、十二月

●高等三學年 第三編 全四冊
發行の月 ▲卷一、四月 ▲卷二、六月 ▲卷三、八月 ▲卷四、十月

●高等四學年 第四編 全四冊
發行の月 ▲卷一、四月 ▲卷二、六月 ▲卷三、八月 ▲卷四、十月

刊行月表

著作者 教育資料研究會

發行者 學海指針社
右社長

代表者 前川一郎

印刷所 開文會
東京市神田區柳原川岸十二號地

發賣所 株式會社 英堂
東京市日本橋區通旅籠町十一番地

關西地方 會社 積文社
大阪市東區南本町四丁目

教育資料研究會編

校外讀本

尋常小學 校外讀本上卷二目次
第四學年

日本の景色(一) 日本の景色(二) 公園、
かはいさうな女の子、人のからだ、煙草
と酒

高等 校外讀本第一編上卷二目次
小學校

毒と藥、湯治の話、昔の旅行、鐵道の話

高等 校外讀本第二編上卷二目次
小學校

楠木正行母子の話、感心な親子の話、蜜
蜂の話、農工業をする虫類の話、昆虫の話

高等 校外讀本第三編上卷二目次
小學校

萬里の長城、鴻門の會、諸葛孔明、

高等 校外讀本第四編上卷二目次
小學校

地殼の變動について、一 地熱の勢力
二 空氣の勢力、三 水の勢力、四 動
植物の勢力、弱肉強食、動物の進化、バ
クテリアの話

教育資料研究會編

校外修身

尋常小學 校外修身書卷二目次
第四學年

共同、勤勉、時を重せよ、志を堅くせよ、
勇氣、身體に就ての心得、知識をみがけ、

高等 校外修身書第一編第二卷目次
小學校

豊臣秀吉、身を立てよ、職務に勉勵せよ、
抱負を大いにせよ、勇氣を奮へよ、皇室を

尊べ、推測の知識、進取の氣象、正直は成
功の基、桂川塾の書生、小事に注意せよ、織田

家の小姓、加藤清正、少壯の武勇、軍中の
仁惠、鬼將軍の勇氣、義侠心、回舊の誠實、

高等 校外修身書第二編第二卷目次
小學校

迷信、勇氣、自立自營、忍耐、

高等 校外修身書第三編第二卷目次
小學校

社會に於ける心得、社會、朋友、近所の人、
他人の身體、他人の財産、

高等 校外修身書第四編第二卷目次
小學校

品位、言語、衣服、勤勞、職業、



發行所 東京 學海指針社

教育資料研究會編

校外歴史

高等 校外日本歴史第一編第二卷目次
小學校

仁徳天皇、物部氏と蘇我氏、天智天皇と
藤原鎌足、聖武天皇、

高等 校外日本歴史第二編第二卷目次
小學校

英雄の割據、織田信長、豊臣秀吉、徳川
家康、

高等 校外日本歴史第三編第二卷目次
小學校

韓土の叛服、學問工藝の傳來とその發達、
佛教の傳來と美術の進歩、物部蘇我兩氏
の争、支那との交通、大化の新政、

高等 校外日本歴史第四編第二卷目次
小學校

室町幕府の衰亡、戰國時代、織田信長の
功業、豊臣秀吉の海内統一、江戸幕府の
創立、

教育資料研究會編

校外地理

高等 校外地理書第一編第二卷目次
小學校

群馬縣 栃木縣 茨城縣 福島縣
宮城縣 岩手縣 青森縣

高等 校外地理書第二編第二卷目次
小學校

岡山縣 廣島縣 山口縣 鳥取縣
島根縣 徳島縣 香川縣 高知縣

高等 校外地理書第三編第二卷目次
小學校

アジヤロシヤ、アジヤトルコ附アラビヤ、
イラン地方印度、印度支那、マライ群島、
大洋洲、

高等 校外地理書第四編第二卷目次
小學校

海流附潮汐、氣候、生物、人種人口附
言語、

發賣所 東京 株式會社 集英堂

世界少年讀本

全十二冊
一冊金拾五錢

- 第一編露西亞
- 第二編清國
- 第三編韓國
- 第四編英吉利
- 第五編佛蘭西
- 第六編獨逸
- 第七編北米合衆國
- 第八編南米諸國
- 第九編以太利
- 第十編印度諸國
- 第十一編南洋諸國
- 第十二編南亞米利加洲諸國
- 亞弗利加洲諸國

森桂園著

露西亞

第一編
頗美本

諸君。こゝに白旗を掲て降参の意を示せる下の圖は露西亞の都です、吾等日本人の能く知らねばならぬ此國の事柄が最も明瞭に最も容易に分るものは此書に限るのです。

發行所
學海指針社



セントピートルスブルク

森桂園著

日露戰史卷一 近刊

我國と露西亞との事について、いろ／＼な本がたんと出ましたが、ほとんど一發始まつてからは、それがまた格別で、新聞や雑誌は、そのページの半分以上を、まるで戦争話で埋て居ります。けれども、始から終りまで、いやまた戦争の真最中で終りになつて居ませぬけれど、つまり引續いて書てある戦争本は、あまり多く出て居ないよ／＼です。勿論、それも少しは無でもございませぬが、大抵小むづかしいものばかりで、少年諸君や何か、家庭でお讀なされる向のは、全く發行せられて居ませぬ。そこで弊社は、この日露戰史を出ことと致しました。これは、確な事實を、始から引續て、すらくと讀易いよ／＼に書てあるのですから、讀て居る中に、自分一人で、再しくなつたり、愉快になつたりいたします。諸君、マア試に一冊讀てご覽なさい。さつとこいつあ、素敵に面白いと仰しやるのしは、弊社が確にお請合申しますから。

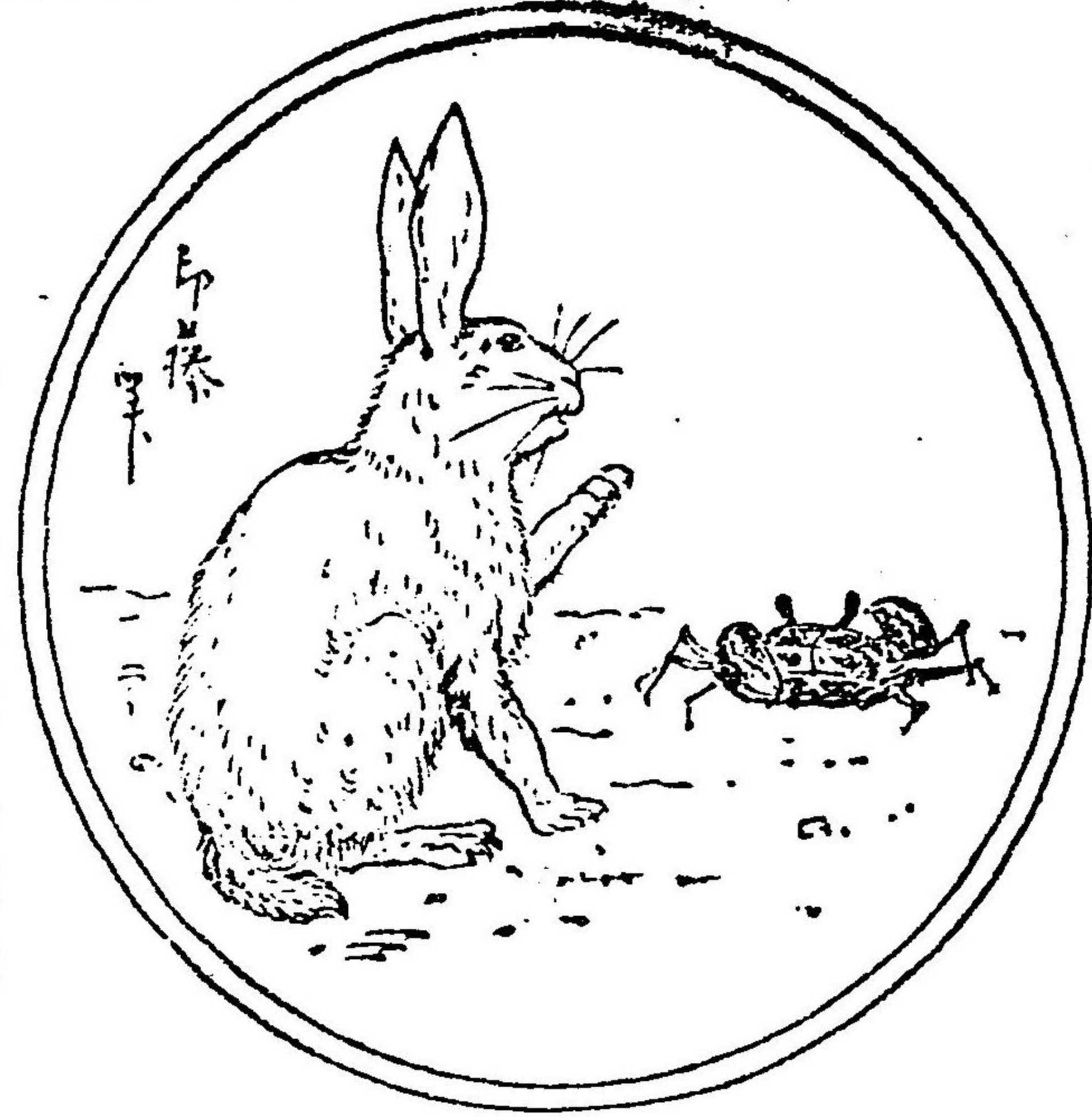
應選 當選
小學校用 征露軍歌

全一冊金四錢
五月上旬發行

新刊 日露交戰地圖

發行所 學海指針社

金一冊拾五錢
郵稅金貳錢



各選 各種學會全
種動全一冊
學會全一冊
校會全一冊
遊藝全一冊
戲全一冊
集全戲遊爭競

少年會社讀本
出版旬下月五

發行所 株式會社 集英堂

新刊 高等小學 理科筆記帳

▲甲種全五冊
▲乙種全四冊
各一冊金七錢

新刊 生徒自習用地圖

▲內國の部
▲外國の部
各一冊近刊

24-27

●四月三日
初號發刊●

新少年年

●定價一冊
金八錢●

行發回一月每

「梅ちゃん、今度新少年といふ雑誌
が出たとね。」

「うむ、四月三日、神武天皇祭の日
に、初號が出たよ。」

「どんな雑誌だらう。」

「僕あ先生に聞いたが、面白くて、
利益になつて、そして、學校で習
ふこと、十分な關係がついて
るとさ。ねへ竹ちゃん。」

「あ、然うなの。だから、
僕あ出るのを待つて
買ったが面白くてよ。」

「あたいも買はうや
皆もお買ひだらう
ねへ。」

「それあ當然さ。」

右の新少年は、弊社から出ました。



● 社針指海學 區橋本日市京東 地番一十町籠旅通 所行發 ●

00

高等
小學 校外修身書

第3編 卷1

国立国会図書館

特

4